

広州旧租界沙面における「歴史的景観」の構築に関する研究

The Constructions of Historical Landscape of Old Concession Shamian in Guangzhou, China

陳 婉菁
CHEN Wanjing

キーワード：歴史的景観、構築主義、近代建築、アクター

Keywords: Historical Landscape, Constructionism, Architectures of Modern Times, Actor

1. 研究の背景・目的

グローバリゼーションの拡大により、景観や生活習慣などが均質化・没個性化し、地域間競争が激化しつつある。そのため、地域は様々なレベルでローカルな個性・アイデンティティを強調するようになってきている。近代、中国広州において、英仏租界であった沙面は、歴史と都市計画にとって不可欠な存在である。近年のグローバリゼーションと上海・香港などとの都市間競争に伴って、沙面は広州の都市イメージの象徴的な存在あるいは主要な地域アイデンティティとして地方政府や住民に認識されつつある。その結果として、沙面における近代の歴史的景観は開発と保全の相克から止揚へ、バランスを取りながら、徐々に観光化してきたと考えられる。

本研究では、建築様式からみた「歴史的建築」とそれを取り巻く社会的状況が開発・保全の相克から止揚へと向かう過程で関わりあう様々な主体を分析することにより、旧租界沙面における「歴史的景観」の構築プロセスを明らかにする。

2. 研究の方法・手続き

沙面では歴史的建築群に対する構築の過程には、ホスト・ゲスト・プロデューサーといった関係者、つまり各アクターの存在がある（図1）。

本研究の研究手法と手続きは以下のとおりである。第一に、歴史的景観に関する既存研究を渉猟する。第二に、沙面に関する資料と政策および現地調査を照らし合わせながら、景観の構成要素を分析する。そのうえで、建築様式ごとに建築の活用手法を把握し、各主体による利用意図を推定す

る。第三に、聞き取り調査とメディア記事の分析から、沙面に関係する各アクターの意図を読み取る。

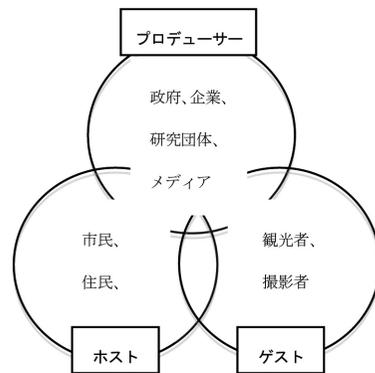


図1 沙面の歴史的景観を構築する主要なアクター

3. 研究の概要

(1) 歴史的景観の構築に関する考察

歴史的景観は、その地域の生活や文化の発展蓄積とともに形成された景観のことであり、歴史舞台から脱出し、観光のする者／される者の関係性の動態により再構成されていると考えられる。人間環境の基盤として、景観の存続性および質的向上を図るために、社会学の観点を用いて歴史的景観の構築プロセスを解明することが必要である。

(2) 旧租界沙面における景観の形成と活用

国際的な大都市を目指すうえで、広州は歴史性に基づく都市の個性が強調しようとする都市イ

メージ戦略に力を入れている。租界沙面が1914年から1920年あたりまでの広州の「黄金時代」に最もシンボリックな存在であった。その歴史的建築群は、都市イメージ戦略に重要な役割を担い、その景観が構築されてきた。

沙面の景観を概観すると、形成期（1856～1948）の租界時期、変革期（1949～1995）の開発時期、探索期（1996～2007）の相克時期、定形期（2008～現在）の止揚時期に分けられ、広州の近代歴史と地域文化を象徴し、人々に非日常的な異国情緒を感じさせる。「歴史的景観」という概念で整理する。

本来の歴史的近代建築の保全・活用だけではなく、新たに景観を維持・承継するように、沙面の担い手が意図的に景観を構築し続けている。本研究では、それらの建築を「歴史的建築物」とし、建築様式の考察から構築の実態を明確にする。

(3) 近代の歴史的建築の建築様式

折衷主義は、数が2番目に多く、基本的に各通りの交差点に立地し、近代には権力をもつ銀行や商社の建物に用いられたが、現代には中国の国家主義を示して負の歴史に抵抗しているため、公的部門や大手企業が利用されている。コロニアル・ルネサンスは、数が最も多く、沙面独自の建築様式であり、租界の商社が利用したが、現在は異国情緒あふれる空間が作り出されるカフェやホテルなどの観光施設として使われている。ヨーロッパの伝統的様式の建築は、保全状態が良いため、現在の沙面において集客力のある観光スポットになっている。住宅、工場として利用された早期現代主義の建築は、現在にも、異国情緒といった観光魅力と誘致力が弱く、住宅として使われている。

(4) 新歴史的建築」の擬似的様式

現代建築は沙面のほぼ中心に集中して分布し、メインストリートに面する。長年の外国による管理を経てようやく返還された沙面に、擬似折衷主

義は、中国政府の権力を示そうとする新築の洋風建築である。擬似アジアン・コロニアルの建築は、ベランダや回廊のようなデザインが多く採用され観光施設として使われている。擬似現代主義の建築は、住宅の機能が求められる一方で、本来の景観と調和するものである。

(5) 沙面における「歴史的景観」の構築主体

住民の嚴氏が立ち上げたサイト「広州沙面網」、行政と住民および武警が連携したボランティア活動、新規テナントによる修景のように、沙面のホスト側は各自の方法で沙面への愛着を示している。

他にも政府は公的部門による旧領事館等の政治利用、大手企業は沙面進出による権威付けや地域貢献イメージの向上をねらい、専門家とメディアは開発と保全の論争とローカルアイデンティティの発信を通して、沙面の「歴史的景観」の意味が転換されるプロデューサーとしての役割を担った。

ゲスト側の観光者と撮影者は、沙面のデザインされた観光空間を楽しむとともに、無意識的に「歴史的景観」の構築を促進させ、現代の沙面の価値を再認識させているといえる。

4. 結論

以上の分析に基づき、旧租界沙面における歴史的景観の構築プロセスは3期に分けられる。各アクターの動きにより、沙面の景観にいかん影響を与えたか、また与え続けるかというアクターの主体性を明らかにした。第I期（1949～1995）には、政治的利用が主導的であり、外国人観光客に向けた開発もあった。同時に、住民コミュニティが形成された。第II期（1996～2007）には、政府による新築に伴い、保護意識が高まり、開発と保全の議論が生じた。特に研究団体と住民の言動が熱くなった。第III期（2008～現在）には、復元プロジェクトをはじめ、沙面のアイデンティティが各アクターの協力のもと強調されている。その中ではメディアが効力を発揮している。それゆえ、沙面のイメージが商品化されるといった新たな構築プロセスに対して、各アクターの関与を巻き込みながら、「歴史的景観」の意味は現在もきわめて複雑に変容している。■

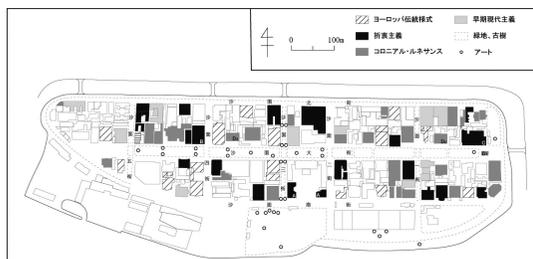


図2 旧租界沙面における建築様式別にみた近代建築の分布